音風景と風景

今井浜／海／ヴェネツィア／運河

山　岸　　健

要　　約

人間は環境とともに、環境において、人生の日々を生きている。環境は人間のトポス、居場所、生活と生存の舞台だが、環境が人間的世界となるために、人びとは協力しながら多元的現実を構成しつづけているのである。「私は、私と私の環境である」というオルテガ・イ・ガセーの言葉は、深い意味を持っている。

環境は、風土として、風景として、人びとの生活と生存の姿として、衣食住や風俗として、自然として、文化として、イメージされるし、理解されるのである。環境は、人間の五感と感性に働きかけつづけているが、人間は、身体と感覚によって環境と世界に住みこみながら、ソフトな人間的時間と意味世界を大地の片隅で、人びとのかたわらで、生きているのである。

生活環境、行動環境、宇宙的自然に包みこまれた大地のさまざまなトポスや道は、いずこであろうと音環境として体験される。さまざまな音や音楽によって意味づけられた世界の片隅で人生の日々が築きつづけられているのである。音や音環境、音風景へのアプローチによって人びとの生活と生存の地平をダイナミックに体験することができる。さまざまな環境音がある。人びとは、音を生きつづけてきたのである。

海辺と海――波の音、海潮音、潮風、海辺で体験される匂いや香りがある。人びとそれぞれの耳の記憶は、どのような音によって意味づけられているのか。

海と海辺は、基本的には広大な自然そのものであり、人間と自然のドラマが体験されるが、運河は、自然と文明・文化がひとつに結ばれた水路であり、人びとの日常生活がにじみ出ている風景、音風景がクローズアップされてくる。ヴェネツィアは、数多くの運河と道と広場によって、人びとの歩行と歩行音によって、さまざまな水音、生活音によって意味づけられている水鏡のトポス（場所、集落、定点）である。水の都は、海の都。アドリア海と運河の微妙なコンビネーションによってヴェネツィアの音のシンフォニーが体験されるのである。歩くことによって夢幻的で現実的なヴェネツィアの意味世界、音の世界が劇的にクローズアップされてくる。人間のアイデンティティが、これほど確かな手ごたえをもって、しかもソフトに体験されるトポスと道が、ヴェネツィアを除いてほかにあるだろうか。この鏡の都は、自己自身との対話が濃密におこなわれる魅力的な大地なのである。

大地の、地球のさまざまな環境やトポス、道、片隅などを深く理解するためには、＜音＞に注目

して、＜音＞に耳を傾けなければならない。音は、人生の旅びと、人間の生活と生存の舞台、まさに＜世界＞であり、人間のトポス（居場所・家・坐席・チャンス）であるとともに、人間にとっての進路、道（方法）、方向――意味なのである。

人間の生活と生存は、意味によって裏づけられており、意味によっておおいつくされているのである。人間は、意味に方向づけられている人生の旅びとなのである。

キーワード：人間、感覚、感性、意味、環境、環境世界、生活世界、環境音、音、音楽、シンフォニー、音風景、風景、海、水平線、波音、運河、ゴンドラ、道、歩行音、アドリア海

港の盛衰とその風光の変化ほど、外から来て観る者の心を動かすものはあるまい。（中略）

世の中はかくても経てけり象潟（きさがた）や蜑（あま）の苫屋（とまや）を我宿にして

こういう種類の三十一字のみが、幾らともなく感吟せられたのである。須磨や明石の物語にもあるように、海辺に住むということは流謫（るたく）であり仮寓であった。いつも憂愁（ゆうしゅう）の情をもってこれを眺めていたのである。海の風景の写し方と愛し方の、ただ一隅に偏したのも当然の結果であった。

ところが海の風景は明治に入ってから、実に花々しいばかり変化してきた。（中略）全体に動くものが多くなって、じっとしているものが少なくなった。（中略）

農村とちがうのは水面が大通りであるゆえに、一切の見物はことごとく眺望に入ってくる。船が巨大になることは水平線の遠くなることであった。

柳田國男

柳田國男『新装版　明治大正史世相篇』講談社学術文庫、145ページ、147ページ――148ページ、第四章　風光推移、三　海の眺め。

たとえば暑い夏の日々がつづいていても、夜半とつぜん森がシウシウと音をたてはじめると、私はアオキタとよぶ秋をつげる風の出たことを知った。と急に、何だか心わびしくなって来る。それまでは波の音もほとんどきこえないが、それからは一夜中ドサリドサリと波のうつ音をきくことが多い。（中略）

海の荒れる前などは、波ひとつない静かな海に突然ドサリと波の音がする。やや間をおいて一つする。そういう波のうち方のする後は、きっと暴風雨になるのである。同じ

ように静かな夜、ドサリドサリと規則正しく波のうちはじめる時は北風になる。北風であっても波の音がシャーッシャーッと何か物をすっているような時は、潮が干(ひ)いて干潟(ひがた)の出ている時である。

それが春二月に入ると、ジャボジャボジャボジャボと小さくやわらかな波音にかわって来ることがある。東風(こち)が吹き出したのである。雲雀東風(ひばり)が吹いて春の来たことをつげてくれる。

森にあたる風の音も風の方向によってちがう。これは表現のしようがないけれど、家の中にいて耳をすましてきいていると、それが何の風であるかということはわかった。

南風の時などは森の南側がゴーッと鳴って、やがてその音が北側のほうへもまわって来る。春さきそういう音がすれば花の咲く季節の近いことを知り、秋この音をきけばそれが野分(のわき)のハエ*であることを知った。

東風は森の梢のほうが高低のない低い音をたてる。これは森の東側を闊葉樹(かつようじゅ)が一面に掩(おお)うているためらしい。

＊　ハエ　南風

宮本常一

ちくま日本文学022『宮本常一』筑摩書房、267ページ―269ページ、私のふるさと、宮の森、のうち、風の音と波の音。

宮本常一は、屈曲の多い東西に長い瀬戸内海の島に生まれている。

―― 山岸　健

世界は、われわれの運命の芝居が演ぜられる基盤であり、舞台である。世界はまた、われわれの諸認識が決定され・使用される基盤である。

感覚によって、われわれの認識は出発する。感覚はわれわれに素材を与え、理性はそれに適当な形式を施すにすぎない。

海水は河川よりも透明である。

カント

『カント全集　第一五巻』41ページ、42ページ、自然地誌学、94ページ、第一部　第一篇　水について

われわれは、生とともにあって、自我と理念の、主観と客観の、人格と宇宙の中間的

位置に立っている。

ドイツ語で、*mit etwas spielen*〔何々と戯れる、何々と遊ぶ〕という場合と、*auf etwas spielen*〔何々（おもに楽器）を弾く、演奏する〕という場合との相違。（中略）後者のほうは対象のより大きな独自の意義と客観的な価値とを前提しているから、*spielen* する〔遊ぶ、弾く〕人の個性が対象によってより深く、より独自に表現される。

過去は、現在の瞬間にまでとどく何らかの片鱗によって、われわれにとっては必ずしも過ぎ去ってはいないし、未来は、やはり現在の瞬間に附着する片鱗によって、単なる理念的な日付けの前置きではなく、実際にわれわれの生によって充たされている。

ジンメル

『ジンメル著作集　11　断想』白水社、23ページ、I　断想、61ページ、同、212ページ、IV　歴史的形成。

そしてすぐに日が暮れる。

人はみなひとりで地心の上に立っている
太陽のひとすじの光に貫かれ、
そしてすぐに日が暮れる。

爽やかな海辺

あたりを揺るがしてたったいま
轟いていた波を
新しい波が打ち砕き
光と砂礫とを引き出してゆく爽やかな海辺よ
ぼくの命はあなたに似ている。

揺り動かされ目覚めてはあなたに聞き入る、
そして途切れれば自失するぼくの空、
夜目にも清らかに浮かびあがる木立ち。

クァジーモド

サルヴァトーレ・クァジーモド、河島英昭訳『そしてすぐに日が暮れる』平凡社ライブラリー、平凡社、16ページ、47ページ。

子どもといっしょに自然を探検するということは、まわりにあるすべてのものに対するあなた自身の感受性にみがきをかけるということです。それは、しばらくつかっていなかった感覚の回廊をひらくこと、つまり、あなたの目、耳、鼻、指先のつかいかたをもう一度学び直すことなのです。

視覚だけでなく、その他の感覚も発見とよろこびへ通ずる道になることは、においや音がわすれられない思い出として心にきざみこまれることからもわかります。

ロジャーとわたしは、朝早く外にでて、別荘の煙突から流れてくる薪を燃やす煙の、目にしみるようなツンとくる透明なにおいをかいで楽しんだものでした。

引き潮時に海辺におりていくと、胸いっぱいに海辺の空気を吸いこむことができます。いろいろなにおいが混じりあった海辺の空気につつまれていると、海藻や魚、おかしな形をしていたり不思議な習性をもっている海の生きものたち、規則正しく満ち干をくりかえす潮、そして干潟の泥や岩の上の塩の結晶などが驚くほど鮮明に思い出されるのです。

音をきくこともまた、実に優雅な楽しみをもたらしてくれます。ただし、すこしだけ意識的な訓練が必要ですけれども。（中略）

雷のとどろき、風の音、波のくずれる音や小川のせせらぎなど、地球が奏でる音にじっくりと耳をかたむけ、それらの音がなにを語っているのか話し合ってみましょう。

そして、あらゆる生きものたちの声にも耳をかたむけてみましょう。

カーソン

レイチェル・カーソン、上遠恵子訳、森本二太郎写真『センス・オブ・ワンダー』新潮社、28ページ、35ページ、38ページ。

液体は無限に変形可能であり、流動する。それは、およそ考えうるあらゆる伝播、つまりコミュニケーションと輸送が行われる選択的な場所である。伝播が終わると、液体は形を作り直す。（中略）本質的にいって海は油の海であって、これに形を与えるすべを心得ているのは風だけである。かくして、液体は記憶をもたないのだから、歴史をもたない。液体は保存したしるしのストックではない。

物質的想像力がわけ知り顔に語るのが、聞こえてくる。海は思い出の不在である。（中略）個体はすべて、痕跡としるしを刻む場所であるから、記念碑、つまり証人、記憶、

情報のストックである。

セール

ミッシェル・セール、豊田　彰訳『干渉＜ヘルメスⅡ＞』叢書・ウニベルシタス、法政大学出版局、69ページ―70ページ、第二章　客観的な干渉――タブラ・ラサの上に書いてあること。

言語は意味をもつ以前に雑音をだす。雑音は言語なしで済ますことができるが、しかしその逆はありえない。（中略）海から潮の流れが生まれ、そして潮の流れからヴィーナスが生まれる。すなわち、無秩序なザーザーという音からリズミカルな流れが生じ、そうした場所から一つの音楽が出現する。音楽の一面の広がりは、今度はあらゆる意味を帯びているが、それは特定な意味以前の普遍的な意味である。洗練され、差異化された言語が、この実測的なもののただなかから、しかじかの意味を選び取って、発信したり浮かび上がらせたりする。

話す者は言語の下で歌い、歌の下でリズムや拍子をとり、リズムの下で基調の雑音のなかに潜り込む。意味はこのように、自分の後に彗星のような長い尾を引きずっている。

セール

ミッシェル・セール、米山親能訳『五感　混合体の哲学』叢書・ウニベルシタス323・法政大学出版局、176ページ、ボックス、のうち、通路。

バレンボイム　音は束の間のものだ。通りすぎていく。音にこれほどの表現力があるのは、呼び出しに応じて出てくるものではないということが理由の一つだ。……

サイード　……僕が音楽に魅せられる理由の一つは、それが音でできているにもかかわらず、沈黙までも含みこんでいるからだ。音楽がみずからを説明する方法は、ある言葉が別の言葉との関係においてみずからを説明するのとは違う。

『バレンボイム／サイード　音楽と社会』アラ・グゼリミアン編、中野真紀子訳、みすず書房、30ページ―31ページ。

山といえば、海、海といえば、山――海と山は、ひとつに結ばれているように思われるが、大地の姿、地形と風景は、まことに多様な様相を見せており、ルソーが人類の島と呼んだ大地へのアプローチにあたっては、大地の表情と光景、出来事、現象をきめこまやか

に見ていかなければならない。視覚の野があるばかりではなく、聴覚や嗅覚や触覚の野などがあるのである。感覚と五感にともなって、人生の旅びと、人間がそこで生きている世界は、驚くべき広がりと深さを見せる。

大地、それは、メルロ＝ポンティが見るところでは、時間と空間の母胎だが、大地は、トポスと道によって意味づけられてきたのである。平坦な地があり、平野がある。盆地がある。山間部の地形と風景がある、谷戸の地形と風景、海岸地方の風土と風景がある。アーバン・ランドスケープ、ルーラル・ランドスケープがある。ランドスケープとならんでサウンドスケープがある。さまざまな音や音風景によって体験される環境と世界に注目したいと思う。

地図の大地があり、風景の大地がある。野原があり、海原がある。大海原だ。海面、海底がある。人類の大地をどのようにイメージすればよいのか。地球の地形、陸地と海がある。地球環境がある。地球のそれぞれのトポス、場所、一定の定点、位置づけられたここ、そこは、いずれも固有の環境、身のまわり、周囲、あたり一帯として、クローズアップされてくる。あらゆる環境は、風土そのものだが、さまざまな生物の生息や活動、動物、鉱物、植物の様相、人びとの日常生活の姿、人間のさまざまな営み、宇宙的自然の姿などに注目するならば、誰もが環境の深遠な地平と光景に注目しないわけにはいかないだろう。

スペインの哲学者、思想家、社会学者、オルテガ・イ・ガセーは、「私は､私と私の環境である」といったが、彼がいう環境は、風景を意味する。風景は、大地の眺め、光景を意味する言葉であり、風景は、まさに大地そのもの、さまざまなトポスや道が、大地のそこ、ここ、片隅が、つぎつぎにクローズアップされてくる。さまざまな音が、独自の音風景として私たちそれぞれの耳に触れる。音は、環境と大地に活気と表情をもたらしている世界の出来事なのである。人間も、トポスも、道も、環境も、音と一体化した状態にあることは、明白な事実である。

ほとんど耳に触れる音がないような場合でも、そのあたりで、また、いずこかで、かすかな音が体験されるのではないかと思う。音がまったく体験されない状態と環境を特別な方法でつくり出すことができるだろうが、環境世界（ユクスキュル）や生活世界（フッサール）は、実際には音環境として体験されるのであり、おのずから音の博物誌が、イメージされるだろう。

耳に触れる音、私たちが巻きこまれた状態にある音によって、トポスや道の状態が推察されるし、イメージされる。音は、トポスや道を理解するための有力な手がかりとなるのである。

大地と水――陸水があり、海水がある。池や沼や湖、河川、いずれも陸水だが、陸水の風景、音風景は、無限に変化に富んでいる。ふたつとして同じ流れはない。同じ河川でも

地点、ところ、場所、いわばトポスによって流れの表情や風景、音体験の様相などが異なる。同じ川とは思えないような場合がある。谷川の音風景がある。その川が平野部に姿を見せると、悠々とした流れとなる。河口の風景、音風景がある。河口で川と海が結ばれる。海は、河川の終着点だ。海は、さまざまな流れを迎え入れてくれる海原である。陸水と海水が混じり合うようなトポスがある。

雨水がある。水滴がある。雨雲が姿を見せる天候がある。なんとさまざまな雲が見られることだろう。雲の姿と形、表情、風景、動き、風情は、まことに多様だ。雲と戯れたくなることがある。雲に情熱を傾けていた人物がいる。ヘルマン・ヘッセだ。ヘッセは、人間的体験、精神的体験、風景体験、という。世界体験を区別したり、分類したりすることは、ほとんど困難ではないかと思われるが、ヘッセが風景体験という、そのアプローチには注目したい。

風景は、人間の背景や脇役にすぎないわけではない。環境は、いつも風景的な様相を示している。人びとは、風景のまっただなかで人生の日々を生きているのである。風景は、音風景となっているといってもよいだろう。音環境でないような環境があるのだろうか。人間にとっては、人間こそ人生の同伴者だが、人間のかたわらには、ほとんどいつも風景、音風景が、立ち現れているのである。

いま、2008年9月17日、水曜日、まもなく午後2時になるところだ。海鳴りが、砂浜に上がる波の音が、耳に触れる。砂浜を打つ、といった方がよいかもしれない。この砂浜は伊豆半島の今井浜の砂浜だ。昨日の午後から、海辺のホテルに宿泊している。五階のゲストルーム、海に面したルームであり、テラスがついている。すぐ前方は砂浜、そして海、海原と水平線が、このルームの地平、スペクタクルとなっている。波音と海鳴りは、このホテルとこの海辺では、基調音であり、鳴り止まない。

テラスに面した海寄りは、大きなガラス面となっており、ガラスの引き戸となっている。窓ではない。いま、このガラスの引き戸が、三分の一ほど開かれているので、浜辺、砂浜、海原の音、音響は、ほとんどストレートに耳に触れる。だが、この引き戸を閉め切ってしまうと音は、さえぎられてしまう。今井浜の海は、目の眺め、静かな風景となってしまい、絵画的なシーンとなる。いうまでもなく絵画が、音と無縁とばかりはいえない。音がイメージされるような絵画は、數多く見られる。大地も、生活空間や居住空間も、日常的には音環境であるからだ。

昨日、9月16日の午後2時すぎから、今井浜の海鳴りと浜辺に打ち上げる波の音は、コンスタントな環境音となっている。昨日の午後、砂浜に出て、岩が姿を見せているトポス、岩場に腰をおろして、今井浜の半島部の集落（トポス）の方向を眺めながら、クレパスで

スケッチを試みたが、海を描いたのである。海原と波打際は、目前だった。砂浜に打ち上げる波は、目を楽しませてくれたが、波音に耳を傾けながら、海辺の風景を制作したのである。音風景のスケッチだった。

今井浜の波打際は、長い長い波打際ではなく、ほどほどの砂浜だが、久しぶりに海の音に巻きこまれながら、海辺でのレジャー・タイムをゆったりと過ごしたのである。いまも波打際の音と海鳴りが、ルームのテーブルまで、耳もとまでとどいている。海の音は、激しい音響となって、響き渡っている。寄せては返す波の姿、波動の光景は、また、波打際の波しぶきや波の戯れと呼びたくなる砂浜の風景は、刻々と変わりつつあるわけではないが、光景も風景も画一的とはいえない。波の動きは、微妙に異なっている。海原も、波打際も、決して無表情ではない。波音や波しぶきの音も、微妙に変わりつつあるといえるだろう。一気に盛り上がるように音の勢いが増す時がある。

2008年9月17日、5時、早朝の海をルームのテラスから眺める。今日の日の出は、5時27分とホテルのロビーに表示されていたが、水平線上にいくらか雲が出ていたために、太陽の姿を目にすることができたのは、予定の時刻よりだいぶ遅れていた。それでも相模灘に姿を見せた太陽を、今井浜の地で、海辺で迎えたのである。大海原は、日の出のみごとなステージだ。

朝食後、7時半すぎに私たちは浜辺に出て、砂浜を散策し、足跡が見当らない朝の砂浜で波打際の波の表情と波音、大海原の朝の風景、音風景を体験したのである。波打際と砂浜、浜辺ほど自然の音、リズムそのものともいえる音が、生き生きと活動的に体験される音のトポス､音の舞台はないだろう。

海辺は光のトポス、明るい舞台だ。森のなかとはまったく異なるトポス、環境である。海原も、浜辺も、たっぷりと光が降り注ぐところだ。

いま、ルームのテラスの円テーブルに向かっている。ドドッ、という波音がこのテーブルに襲いかかってくるようだ。ごう、ごう、という波音、轟きが、虫の音色とともに耳に触れている。波音にかき消されそうだが、どこからともなく虫の音が渡ってくる。このテーブルの前方は海原だが、水平線のかなたにうすぼんやりとだが、山影が、浮かび漂っている。はかないアイ・ストップだが、それでもパースペクティヴの焦点、到達点となっている海上、かなたの山である。幻影ではない。

耳に触れるのは、まるで海の交響曲、さまざまな波音の協奏曲である。轟く。鳴く。叫ぶ。語らう。どよめく。静まる。襲いかかる。忍び寄る。走る。広がる。波の姿、形と動きは、形態的であり、徹底的に音響的である。調べであり、リズムだ。海原は、勢いとたえまなしの動きが体験される海の野原、平原である。鳥の鳴き声が、突然、耳に触れる。

さきほどまで波打際に近いところ、いくらか小高い砂山のようなところから点々と岩が

姿を見せている岩場と波打際、海原、水平線、はるかかなたの山影をクレパスでスケッチしていた。ホテルにもどって、ルームのテラスのデーブルに向かって筆を走らせていたのである。

かなり大きなヴォリュームでドヴォルザークの「新世界交響曲」の「家路」が、波音をかき消してしまうかと思われるような状態でこのテラスまで響き渡ってきた。時計を見ると午後5時。ドヴォルザークによるところの時報である。時報が鳴り止むと波音の復活である。今井浜での波音に包まれたドヴォルザークだった。この地に住む人びとにとっては、日常的な時報である。社会の時間、制度としての客観的時間が、海辺のホテルのテラスで体験されたのである。いろいろな虫の音が、いま、耳に触れる。波音は休むことを知らない。はるかかなたの山影は、下の方はほとんどかすんでしまい、山の上の方だけが、わずかに見える。波音と海原のシンフォニー、波打際の音風景は、ほとんど虫の音とひとつに結ばれているように感じられる。いま、5時17分だ。波音が轟く。虫の音は、軽やかだ。

テラスからルームに入り、鏡の前のテーブルに向かう。大きなガラス戸を閉め切ったが、かすかに海の音が耳に触れる。一日の時間帯によって海の音、波打際の音、海辺の音風景は、微妙に変化するのだろうか。海の音が、このルームのなかでは、まったく耳に触れなかったと思っていたのに、夕方のいま、通奏低音のように、室内をまるで慰めるかのように、波の音が、ルームのなかでも聞き取れる。波音が高くなったのか。

テラスは、微妙なトポスである。完全な室内ではないが、まったくの屋外ではない。なかば部屋のなかであり、なかば屋外だ。テラスでなければ耳に触れないような音がある。それにしても海鳴りや波音は、まことに壮大な持続的な音楽ではないだろうか。自然のなみなみならぬリズムとテンポがダイナミックに体験されるトポスとして海岸、海辺、浜辺は、特別に注目に値する大地の片隅なのである。

浜辺や砂浜は、五感の目覚めと躍動が生き生きと体験されるところだ。潮の香りがある。潮風や浜風が体験される大地は、人びとの感性に微妙に働きかけてくる。砂浜では足が取られそうになる。人びとは、砂浜であらためて歩くことを自覚する。浜辺は、耳のトポスであるだけではなく、手が働き出すところだ。貝殻、藻、木片、さまざまな漂流物などが姿を見せているとき、思わずそうしたものを手にとってみたくなる人びとは、少なくないだろう。

海辺は、水平線が体験されるトポスであり風景体験という点で注目されるところだ。

2008年9月18日、いま、10時16分、10時ころから、ルームのテラスのチェアに腰かけて、海の音、波のどよめき、波音に耳を傾けている。小雨である。さきほど鳥が高いところを

飛んでいった。いま、別の鳥が右手の方で旋回して、左手方向へ飛び去っていった。波打際から離れた海原に白波が姿を見せている。そうした白波が、時々、遠くの海原で生じている。うねる波、押し寄せる波、いろいろな波の波乱が見られる。折り重なるような波、砂浜にしみこむように広がる波、あわのような波、いろいろな波の模様が目に触れる。海原は、昨日よりもいくらか黒ずんで見える。くだけ散る波、波のリズム――みごとなまでに音、また、音、音の強弱、ヴォリューム、激しさ、多様多彩である。

昨日、水平線上にぼんやりと姿を見せていた山影は、大島の三原山だった。島影が目に触れたというよりは、昨日、目に触れたのは、ほぼ三角形の山影だった。海といえば、海岸、海辺、浜辺だが、水平線であり、島である。日本は島国だが、ほんとうにさまざまな島がある。西の方から羽田に向かって空の旅をしていた時のことだが、空中から眼下に大島を見下ろしたことがあった

このテラスから左右、前方に松の木が見える。その先に白波の砂浜、そこから海原、水平線は、ぼんやりとした水平線である。昨日、明らかにアイ・ストップとなっていた三原山は、今日は、まったく見えない。見えないからといって、かなたに大島が位置していないわけではない。天候状態のためだろう。波音が昨日とくらべて明らかに違う。ベランダの前方、右手の方に、昨日、スケッチした岩場が見える。海辺や砂浜では、岩場は、頼りになる確かなトポス、場所だ。砂地や砂浜は、不安定で、どことなく頼りないところだ。岩場やひとつの石や岩は、腰かけ、椅子、確かな大地となる。

海、海辺、浜辺、砂浜、海原などとともに姿を見せる画家たちがいる。フリードリッヒ、クールベ、ブーダン、モネ、マグリット……海や海原、浜辺、そして岩場、船などは、これまで画家たちのモチーフとなってきたのである。ドイツ・ロマン派の画家、フリードリッヒには、海辺や海や船などが姿を見せているさまざまな作品がある。海辺の海に突き出した岩に人物が何人か描かれており、かなたに見える船の方を指しながら眺めている絵がある。うしろ姿の人物だ。フリードリッヒには、窓辺の女性が描かれた絵がある。この女性は、窓辺に立って、向こうの方を眺めている。うしろ姿の人物だ。見ることとまなざしがモチーフとなっている絵だが、海辺に姿を現している人びとも見ることに熱中している。フリードリッヒをまなざしの画家と呼びたくもなるが、音風景が失われているはずはない。人びとは、全身で見るのであり、全身で耳を傾けながら、世界と対話しつづけているのである。人びとは、世界に巻きこまれた状態で人生の日々を生きつづけてきたのである。

感覚とは、身体の現前であり、世界の現前である。人間は、自己自身の身体と五感、感覚によって、世界に住みついており、世界と結ばれているのだが、海辺は、身体と身体感覚、方向感覚が、はっきりと自覚される、取り戻されるトポス（ところ・場所）ではないかと思う。海辺や砂浜で、岩場で、水平線にまなざしを注がない人はいないだろう。水平線や地平線は、行き止まりの壁や終点ではない。連続性と無限性、おおいなるかなたが、

イメージされる風景なのだ。視界のドラマがあるが、聴覚の野の音風景や匂いや香りの野もある。海原や海辺が描かれた絵画は、音が満ち満ちている音風景の作品なのである。

クールベは、海原や波や海辺と正面から向き合っている。もちろんクールベには、さまざまなモチーフの絵がある。ブーダンには、砂浜に集う人びとが描かれた絵がある。砂浜や海浜が、まるで社交とレジャーのトポスとなっているように見える作品だ。砂浜、浜辺とともに、海水浴の光景が、クローズアップされてくることは、いうまでもない。海で働く人びとや海辺での人びとの生活と労働がモチーフとなった絵画作品がある。日本では、例えば、青木　繁の作品が、注目されてきたのである。そうした生活と労働において人びとによって発せられる声や掛け声などがある。音とリズムがある。リズムを伴った人びとの動きがあり、波音のリズムがある。

印象派を代表する画家、モネは、ジヴェルニーでは、大きな鏡ともいえる池の睡蓮を描き、また、この地でポプラ並木や大地の積みわらを描いているが、大西洋に面した海辺で海景を制作している。パリのセーヌ右岸のサン＝ラザール駅でモネは、鉄骨ガラス張りの大屋根とともに噴煙の蒸気機関車、蒸気などを描いている。モネの耳には自然の音（海辺では）や文明の音（サン＝ラザール駅では）が触れていたのである。さまざまな絵画空間においては、まことに多種多様な音と音風景が体験されるが、印象的な絵画として、ミレーの「晩鐘」を紹介したい。私もミレーと同じように自然が好きだ、といった人物がいる。ライフlife　研究の道を歩んだ西田幾多郎である。西田は、無限なものの動きを海とともに体験した哲学者だが、彼の生まれ故郷は、石川県の宇ノ気、日本海が西田の原風景となっていたのである。西田の生活史をひもとくと、季節に応じて、京都と鎌倉、それぞれの地での日常生活と思索の日々が見られる。鎌倉では、稲村ガ崎の姥ガ谷の地が、西田のトポス、鎌倉宅の地だった。西田の家（寸心荘）を三度、訪れているが、谷戸の一番奥にあたる小高いところにこの家が位置しており、日本風家屋の二階、和室から眺めると、相模湾の海、七里ガ浜の海面が、かなたに遠望されたのである。海の人、西田幾多郎は、視界に海が浮かんで見える谷戸の地で、鎌倉生活を営んでいたのである。谷戸の道を下っていって海辺に出て、七里ガ浜を散策することが、西田の楽しみとなっていたのである。日課となっていたのかもしれない。この七里ガ浜の海岸道路脇の遊歩道のとあるところには、西田の短歌が刻まれた記念の石碑、モニュメントが姿を見せている。波音の地である。江ノ島が見えるところだ。

デカルトに敬意を表しながらも、西田幾多郎は、「われ行為する、ゆえにわれあり」、「われ歩く、ゆえにわれあり」という。京都、東山の山麓には、哲学の道と呼ばれている遊歩道がある。流れに沿った散歩道だ。七里ガ浜では、西田は、波音と海を生きたのである。ジンメルは、海において生をイメージしている。彼は、アルプスの万年雪の風景において死をイメージする。

行為とともに姿を見せる人物として、ゲーテの名を挙げたいと思う。行為の生産性に彼のまなざしが注がれている。ゲーテの『ファウスト』においては、「初めに行為があった」という台詞（せりふ）が、目に触れる、耳に触れるシーンがある。イタリアへの旅――ヴェネツィアでゲーテは、人びとのなかにあって、孤独を体験している。フランクフルト生まれで、ライプツィヒの大学で学んだゲーテは、このイタリアの旅でつぶさに海を体験したのである。ヴェネツィアでアドリア海を体験したのだ。海辺で海の生物を体験したゲーテ、ある日、彼は、サン＝マルコ広場にみごとなランドマークとなって姿を見せているサン＝マルコの塔にのぼって、高いところからヴェネツィアを眺め、ヴェネツィアの潟の状況や潮の干満の姿を観察したのである。フィレンツェを芸術作品のような都市と呼んだジンメルは、ヴェネツィアを仮面のような都市、もぎ放たれて海に漂う花、と呼んでいる。

私たちは、家族三人で何度もヴェネツィアを旅しているが、ある時、私たちは、サン＝マルコ広場の船乗り場から船でリドへ渡って、トーマス・マンの『ヴェニスに死す』にも姿を見せているリドを散策して、もとのサン＝マルコにもどってきたことがあったが、この時にアドリア海をたっぷりと体験することができた。海からヴェネツィアへ、というコースこそ、ヴェネツィアへの第一の道といえるだろう。リドからヴェネツィアの本島をめざす船旅においてヴェネツィアの真骨頂が体験されることは、まちがいないと思う。

ヴェネツィアのさまざまな音がある。運河や海で体験される音、さまざまな道を歩く時の音、人声、ざわめき、鐘の音……ゴンドラの水音こそ、ヴェネツィアの音だと思う。ゴンドラに乗っていたゲーテは、舟唄を耳にする。ヴェネツィアとは、ゴンドラそのもの、また、歩行の空間とトポス、道、また、道、あくまでも運河と橋、そして広場――この水の都では、ゆき来するさまざまな船・舟の音が体験される。そして靴音、歩行者の歩行音、ヴェネツィアでは、大運河などを航行している水上バス、船が日常的な交通機関となっているが、歩くことは、ヴェネツィアでは日常的なことだ。観光客にとっては、ゴンドラが親しみ深いが、ヴェネツィアは、歩行にともなって、さまざまな相貌と光景と音や光を体験させてくれる驚くべきトポスなのである。

河川は矢印そのもの、流れの方向性は明確だ。ところが運河となると流れはつかみにくい。動いているのか、いないのか。ジンメルは、ヴェネツィアの運河のあいまいさを指摘している。海――寄せては返す波、波打際は波と水平線によって方向性がイメージされる。海岸線は、エッジがはっきりと理解されるところだ。波打際は、微妙なエッジが体験される大地である。水際というトポスのなかでも砂浜と浜辺は、特別なところではないかと思う。流れゆく水、河川の魅力は格別だが、海辺、砂浜ならではの世界体験がある。海原の先の先の陸地や島や大陸などを思い浮かべると海における世界体験の広がりには深い意味がある。海といってもその表情と姿、風景は、バラエティに富んでいる。海の色は、さま

ざまだ。地中海色と呼ばれる色がある。

海潮音がある。音風景と迫力がある音という点では海と海辺、浜辺は、特別なところだと思う。砂浜の波打際は、波音の迫力と波形のやさしさと微妙な模様が体験されるところだ。砂と岩石の対照に注目したい。そして海水、それは運動そのもの。潮の香りや浜風がある。浜辺は、五感の活発な働きが体験されるステージだ。漂流物とは、想像力そのもの、夢想が広がることがある。貝殻や藻の姿、形の感触がある。貝殻においてトポスである家がイメージされるように思う。バシュラールは、世界の片隅である家を巣、貝殻、繭、城と呼んでいる。漂流物においてイメージされるエピソードやドラマ、モチーフがある。椰子（やし）の実のエピソードと作品がある。

大地の音環境に耳を傾けていきたいと思う。鳥の鳴き声や虫の音がある。動物や昆虫が立てる音がある。生活世界や環境世界は、さまざまな生物が、そこで生きている世界なのだ。海洋の生物がいるのである。

＜汝自身を知れ＞――あまねく知られたギリシア、デルポイのアポロンの神殿の銘である。この銘は、多くの人びとによって取り上げられてきたのであり、この銘をふまえて、さまざまなメッセージが、私たちに送り届けられてきたのである。ゲーテは、＜汝自身を知れ＞という言葉に導かれて、人びとのまなざしが人間の方へと向けられてきたことに疑問を抱き、世界に注目しなければならない、という。世界において、世界とのコンタクトにおいて、世界の方から、人間に光りが投げかけられるのである。

1997年3月20日、この日、私たちは、家族三人でアテネから路線バスで山地、山間部の古代ギリシアの遺跡デルポイを訪れて、春の陽光を浴びながら、アポロンの神殿の遺跡や円形劇場、岩山、糸杉、山地の斜面、小さな黄色い花、デルポイの光と風、音風景などを体験したのである。

エーゲ海へ、アテネの外港、ピレウスから私たちは観光船に乗船、一日コースでエーゲ海のいつくかの島をめぐり、古代の神殿の遺跡を訪れ、海辺の集落、トポスを歩き、エーゲ海のクルーズにおいてギリシアを体験したのである。

アテネのアクロポリスで私たちは、パルテノン神殿、まさに建築文化のモニュメンタルともいえる遺跡を見学したが、アクロポリスから、はるかかなたにエーゲ海を展望することができた。

ある時、私たちは、ローマから空路、シチリア島のパレルモに到着して、ゲーテが旅したことがあるパレルモやアグリジェントを旅したことがあるが、パレルモからアグリジェントに向かう時、列車の車窓から地中海を目にすることができた。アグリジェントの神殿の谷と呼ばれている古代の遺跡群をめぐり歩いていた時にも、かなたに地中海が見えたが、この時の地中海の先の先は、アフリカという地に私たちは、立ったのである。

ある年、イタリアからコート＝ダ＝ジュールを旅して、南フランスに向かう時、車窓からも、ニースの海岸でも、地中海を体験したのだった。

時は変わるが、1992年1月、私たちは、パリからイギリスへ、ロンドン、ストラトフォード＝アポン＝エイボン、ヨーク、と旅して、スコットランドのエディンバラを訪れる。私たちのエディンバラの宿、ホテルは、北海がほぼ眼下、すぐそこというようなところに位置しており、市街地からはずれたところにあったこのホテルで私たちは、スコットランドの風土と風景を、スコットランドの音風景を体験したのだった。私たちは、宿近くの北海の海辺に行き、北海の海水に手を入れて、それぞれの手で北海に触れたのである。手で対象に触れることは、根源的な世界体験なのだ。

また、ある時、私たち家族は、三人で縁あって韓国を旅したが、この旅のおりに済州島を訪れた旅の日々が、記憶に新ただ。ホテルは、東シナ海に臨んだ海辺に位置しており、東シナ海の変わりゆく海景、光景を眺めた旅の日を思い出す。

イギリスのチェスタトンは、見るべき都市は形をそなえている、という。このような都市としてチェスタトンは、ローマ、パリ、エディンバラの各都市を挙げている。

さきのゲーテは、ナポリから地中海の旅を体験して、パレルモ港に入港したのである。シチリア島に到着した時、ゲーテは、まるでクロード・ロランの絵かと思われる風景を体験したのである。私たちは、アグリジェントの神殿の谷を散策しながら古代遺跡の地をまわっていた時、クロード・ロランの絵から抜け出たかと思われるような風景を目にしたのである。クロード・ロランは、イタリアの光と色彩、雰囲気を画面に表現している画家だが、海港と海辺と海、海沿いの建築、建造物、船は、ロダンが太陽の画家と呼んだクロード・ロランの代表的なモチーフだ。この画家の画面に音楽が流れている作品がある。

旅びとが目にする、耳にするさまざまな海がある。海や海辺は、光の宝庫だが、海辺は、音の宝庫でもあるといえるだろう。風景、風土、風光、風俗……風という言葉とともに、自然が、人びとの暮らしと文化が、大地が、人間が、クローズアップされてくる。風貌、風情、風物詩、日本風……などという言葉がある。

海原、野原と対照的なところに森が姿を見せている。海の音があり、森の音がある。野原で体験される音がある。さまざまな風の音がある。

数年前、私たちは、金沢を訪れてから輪島へ。ある日、単独で西田幾多郎の生まれ故郷、宇ノ気（現在、河北市）で西田の足跡と哲学の記念館をまわって、金沢にもどったが、家族三人で能登半島の日本海に臨む輪島で、海辺の宿で、日本海を体験したのである。西田にとっては、日本海こそ彼の生活史において原風景であり、幼時、西田は、日本海に臨む松林のなかを走りまわって遊んだのである。西田のアイデンティティは、日本海によってもかたちづくられていたのである。

私たちは、高岡に出て、高岡からバスで散居村で知られる礪波（となみ）平野を抜けて、山地に入り、合掌造りの家屋で名高い五箇山を訪れて、一泊、合掌造りのトポス、みごとな山村の集落景観を体験することができたのだった。和辻哲郎は、人間存在のなかの光景を景観と呼んでいる。それにしても日本列島で旅びとの目に触れる民家や集落の景観、屋根の姿、形などのなかには、記憶の道しるべとなるようなすばらしい風景がある。そうした民家や集落で体験される音や音風景、五感の地平がある。

音の効果、音の演出、音による雰囲気づくりがある。JR横浜線は、2008年9月23日、開業100周年を迎えた路線だが、鶴見川が視野に入りそうなところを走行する区間がある。この横浜線、町田駅のプラットホームでは、はずんだような鳥の鳴き声が耳に触れる。森のなかで耳に触れる鳥の声だ。勢いがあるので朝方の鳥の声かもしれない。演出された、環境音となった鳥の鳴き声である。時おりアナウンスの声が流れる。西田幾多郎は、音楽を耳の自覚と呼んだが、耳の自覚がうながされるような音があると思う。

鶴見川の源流域は、町田市と多摩市が接するような町田市域の谷戸と呼ばれるトポスであり、湧水の池が、鶴見川の中心的な水源である。鶴見川は水の道であり、この水の流れ、道筋の風景と音風景がある。

シンフォニー――鐘の音色が耳に触れる交響曲がある。例えば、ベルリオーズの「幻想交響曲」の演奏場面で流れる鐘の音色がある。

私たちは、ウィーン郊外のハイリゲンシュタット、ベートーヴェンゆかりの地を訪れたことがあるが、この楽聖の「田園交響曲」は、音風景がイメージされるシンフォニーではないかと思う。

音楽のやさしさと力、音の魅力と表情がある。人生の旅びとは、音や音楽の世界を生きつづけないわけにはいかないのである。

＜附記＞

このエセーは、社会学・感性行動学・サウンドスケープの研究者、山岸美穂の方法（道）、アプローチ、モチーフとジャンル、生活感覚をふまえて執筆されたエセーであり、この作品を私たちの共同での執筆としてご理解下さると幸いと思う。音・音楽・音風景、そして音の博物誌――このような方向をめざして、さらに研究を発展させていきたいと念願している。

なお、フランス語、エセーは、モンテーニュにおいてスタートした言葉であり、試み、試みることを意味する。英語、エッセイは、フランシス・ベーコンに見られるが、フラン

ス語、エセーは、英語、エッセイに先行している。マルセル・モースには、『贈与についてのエセー』（『贈与論』）と題された作品がある。

＜文献＞

このエセーにおいては、特につぎの作品をごらんいただけると、まことに幸いと思う。

山岸美穂『音　音楽　音風景と日常生活　社会学／感性行動学／サウンドスケープ研究』慶應義塾大学出版会、2006年4月。

山岸美穂・山岸　健『感性と人間　感覚／意味／方向　生活／行動／行為』三和書籍、2006年10月。

責任編集　山岸　健、編集　草柳千早・澤井　敦・鄭　暎恵『社会学の饗宴Ⅰ　風景の意味――理性と感性――』、『社会学の饗宴Ⅱ　逍遥する記憶――旅と里程標――』三和書籍、2007年2月、2007年6月。

山岸　健「旅と人間――トポスと道と風景――」（同書、Ⅰ、所収）

山岸美穂「子どもの音体験と音風景」（同書、Ⅱ、所収）

山岸　健・山岸美穂『日常的世界の探究　風景／音風景／音楽／絵画／旅／人間／社会学』慶應義塾大学出版会、1998年5月。

山岸美穂・山岸　健『音の風景とは何か　サウンドスケープの社会誌』　NHKブックス853、日本放送出版協会、1999年6月。

山岸　健・山岸美穂『日常生活と旅の社会学　人間と世界／大地と人生／意味と方向／風景と音風景／音と音楽／トポスと道』慶應義塾大学出版会、2008年9月。

今井浜の海　　山岸　健